

公共施設・団体で働く職員、アートで地域をつなぐコーディネーターになる

堺市内の公共施設・団体に所属する事業企画担当職員等を対象とした研修事業は、公益財団法人堺市文化振興財団(以下、財団)と堺アーツカウンシルによる協働事業です。各所属の受講者が地域の様々な主体(教育・医療・福祉・観光・国際交流・まちづくり)と連携したアートワークショップを企画・コーディネートするためのスキルを獲得することを目的とします。また公共施設の管理運営は財団や民間会社等が指定管理者になり、多様化する地域性や社会的ニーズに応えています。しかし、指定管理者同士が交流する機会は限られており、経験や学びを共有できる場はほとんどありません。

そこで堺市および財団の呼びかけにより、堺市の文化芸術推進計画で重要視されている「社会包摂」の考え方を身につけ、事業の企画立案にいかすために、所属や立場を超えた研修事業を2022年からスタートしました。初年度は2年間をかけて、2024年度からは1年間で実施してきました。

1年間のうち、前半は座学・模擬実践を行います。「工作教室」や「体験講座」と「ワークショップ」の違いを知るところから始まり、「社会包摂」という用語に抱きがちな「支援する」という印象から離れ、支援する/されるの関係ではないフラットな態度や視座を持つことの大切さを学びました。模擬実践では講師のワークショップにコーディネーターの立場に関わりながら構成や進行役の振り舞いを振り返り検証分析します。そして、ワークショップ受け入れ先のヒアリング、アーティストへの伝え方を学びます。後半はこども食堂、子育て広場、障害者支援機関といった具体的な現場で、アーティストと連携してアートワークショップを企画実施します。ワークショップの終了後には内容に加えて、コーディネーターとして何を気づいたのか、学んだのかという視点で振り返ります。

2024年度は、施設職員、市役所職員、外郭団体職員から計12名が受講しました。過去受講者の中には、地域へのアウトリーチ事業を担当するようになった方もいます。より実践的な研修となるよう今後も工夫を続けます。

人々の暮らしのためのアートへ

今年度も無事、1年間の研修を終えることができました。実践先のさかいっこひろば、視覚・聴覚障害者センター、東深井つどいば食堂ふらっとの皆様に、改めて厚くお礼申し上げます。研修のテーマである社会包摂という考え方、そして(アート)ワークショップという取り組みは、近年各地で取り組まれつつあるとはいえ、まだ広く知られてはいません。この研修で社会包摂とは、「それぞれに違いのある私たちが、そのまま互いに尊重され、共に生きることができる社会を作る営み」であると表現しています。「アート」とか「文化芸術」という日常からは縁遠いような印象をお持ちの方も少なくないかもしれません。他方でその「アート」や「文化芸術」の領域で活動するいわゆるアーティストが取り組むワークショップには、この「社会包摂」と親和性が高い取組がとて多いのです。そこで私たち堺市文化振興財団と堺アーツカウンシルは、この「社会包摂」というまちづくり、社会づくりに、「アート」「文化芸術」を通じて取り組むことをめざし、この研修を企画しました。「アート」や「文化芸術」が市民の皆様の生活と結びつくことを、公共施設、市役所・区役所、外郭団体の職員が理解して、「人々の暮らしのためのアート」という発想を持つことは公共的にとても意味のあることだと考えて、毎年この研修への受講を呼びかけて参りました。

1年間の研修を終えた受講者の感想からは、「最初は戸惑っていたけれども、段階を踏んでワークショップの意義が分かるようになってきた」「社会包摂という時に、“弱者に対する支援”という勾配ある関係性ではなく、フラットに関わろうとする態度が大事だと分かった」「他の受講者とのやり取りで、自分にはない視点を得ることができた」という声が寄せられました。実際にこの研修では、受講者が翌年度には地域プログラム(アウトリーチ事業)の担当を任されることも多く、受講者のスキルアップにもつながっている様子が伺えます。また、この研修を通して受講者は、地域を知る方法、地域の人々と出会う方法を学びました。是非市民の皆様には、何か困ったことや相談事があれば、受講者が所属する各施設や団体を頼っていただければと思います。

また、各施設や団体で受講者を送り出してくれた所属長の皆様にも、この場を借りて感謝申し上げます。少ない人員で多忙な業務をこなす職場から月1回継続的に職員を派遣することは、所属の理解無くしては成り立ちません。この研修での学びは、地域プログラムだけでなく施設等を活用した事業や、行政の事務事業にも役立つ部分があると思います。是非研修での経験を活かしていただければ幸いです。

公共施設・文化会館は、日々市民が訪れる言わば地域の最前線に立つ仕事と言えます。その施設職員の方が地域をよく知り、地域の人々と連携できることで、市民の皆さんの活動もより活発化していくと思います。また近年は、劇場や文化会館に留まらず、美術館、博物館、図書館、文書館、大学等が連携することについて、MULTIという概念で議論されています。この研修も当初は、公共文化施設の職員を対象としていましたが、観光コンベンション協会、さかい利晶の杜、人権ふれあいセンター、区役所からも受講者を募ることができ、人材のネットワークが一層広がったことを本当にうれしく思っています。この縁をきっかけに日常的な連携が実現できれば、互いにより事業の幅が広がるでしょう。

この研修は堺市文化振興財団と堺アーツカウンシルが共同で主催しています。このように財団とアーツカウンシルが全く別個の存在でありながら互いに連携して事業を推進している自治体は、実は多くありません。また堺市文化振興財団としては、堺市内に様々な文化芸術に携わる(民間)事業者がある中で、その皆様をつなぐ中間支援組織の役割を意識しつつ、今後もこの研修事業を展開させていきたいと考えています。

最後に、コーディネーターという役割は、「アート」や「文化芸術」の領域に限らず、今日あらゆる業界・領域で必要とされています。この研修で学び、経験したことには、大変大きな応用可能性があり、これまで受講した方々には是非場所を限定せずに様々な機会に応用していただきたいです。これから受講を予定している方々には、ご自身の持つ可能性に大いに期待してください、とても嬉しいです。

公益財団法人堺市文化振興財団 事業係長 常盤 成紀

公益財団法人堺市文化振興財団
590-0061
堺市堺区翁橋町2-1-1
072-228-0114(平日9:00~17:30)



堺アーツカウンシル
堺市文化観光局文化国際部文化課内
590-0078 堺市堺区南瓦町3-1
072-228-7143
bunka@city.sakai.lg.jp

参考：2023年度 公立文化施設職員が地域に出てアートコーディネーターになるための2年間
— 社会包摂についての学びと実践をふりかえる
【記録冊子PDF公開中】 https://note.com/sakai_bunshin/n/nf04b75a82039



3チームによるアートワークショップ

ヒアリングをもとに、アーティストを選定し、実践に取り組む



ふわふわとぽんとぽん

子どもと保護者とみんなで身体をゆるめて、日常の場がゆるむ

2025年2月8日(土)
11:00~12:00、14:00~15:00

アーティスト：佐久間 新(ジャズ舞踏)、鈴木 潤(音楽家)

対象：子ども(未就学児、小学生)、保護者

会場・受け入れ先：さかいっこひろば

受講者(所属)：
谷村 聡美(堺市立東文化会館)、
黒葛野 繁之(堺市立西文化会館ウエステイ)、
江崎 智信(さかい利晶の杜)
岡本 莉奈(堺市文化課)

さかいっこひろばのヒアリングでは、父親がもっと楽しんで子どもに関わってほしい、という思いがあることから、その場にいる人も自然と身体を動かしたくなるようなジャズ舞踏の踊り手・佐久間新さんを起用。その場をささえる音楽のパートを即興に強い鈴木潤さんに依頼した。

大雪のため、アーティストが楽器類を持参できず財団から運ぶことになり、受講者は協力し合って搬入作業を行った。午前部の会場は10畳ほどの区切られた部屋。受講者には空間が狭いことから気配を消したりいっしょに楽しんだり、影響をあたえる存在であることを意識してほしい、と事前にアーティストから伝えられた。午前は最初にさかいっこひろばの施設長の挨拶から。始まると、小さい子どもが他の大人に関わりに行く様子もみられ、安心な場になっていることが感じられた。午後の会場は広いことから、挨拶はなく気がついたら始まっている演出に。午前・午後ともに、まずは佐久間さんが親子にひとりずつ関わっていくことから始まる。その後、子どもたちの反応に佐久間さん、鈴木さんが即興で応答し、場の温度をあたためてゆく。自然と会場にいる人たちがリラックスし、動きがちあがっていく場になる。午後は出入り自由な場だったこともあり、大きな空間をダイナミックに使った。走り回る子どももいたり、雪の舞う窓ガラスをバックに踊る佐久間さんを見つめる瞬間があったり、遠くにいる子どもが鈴木さんの音楽に反応してリズムをとったり、佐久間さんと視線を合わせるなど、さまざま音や動き、視線が交差する時間となった。さかいっこひろばのスタッフの方が自然に楽しく身体を動かして、場に安心感を与えてくれた。受講者もまるで保護者のような眼差しで子どもたちに関わり、さりげなく動き、場の空気をつくることに寄り添った。さかいっこひろばではふだんは子どもの集中力がもたないということで30分程度のプログラムが多いのだが、1時間があつという間だったと、受講者やスタッフからの感想。振り返りでは、配る予定だった楽器を子どもに配らなかったり、音楽で盛り上げるのは簡単だがあえてそうしなかったりしたことなど、アーティストがその場に応じた選択をしたことが話され、コーディネーターとアーティストの信頼関係を考える機会となった。

堺AC PD 上田 假奈代



おにぎりにぎにぎ会

場づくりとしての、料理と食。多様な人が出会うとは

2025年2月18日(火) 10:30~14:00

アーティスト：中川 圭永子(俳優)、
中脇 健児(ファシリテーター)、
監修：小山田 徹(美術家)

対象：視覚障害のある人とヘルパー

会場：堺市立東文化会館

受け入れ先：視覚・聴覚障害者センター(堺市健康福祉プラザ)

受講者(所属)：
青山 彩美(フェニーチェ堺)、
山上 成子(堺市立梅文化会館)、
西岡 功祐(堺市立人権ふれあいセンター)、
川崎 詩織((公財)堺市文化振興財団事業課)

受講者が視覚障害者センターでヒアリングを行い、普段の暮らしのなかで家族から料理は危ないとして取り組めていない、という話を聞いて、集った人といっしょに料理をして食べる、という企画が生まれた。焚き火を囲み、人々が集う場をつくる美術家の小山田徹さんにも関わってもらうことでアートとしての取り組みを意識した。また中途視覚障害者で俳優の中川圭永子さんは食事づくりのボランティアを数年続けていて、中脇健児さんも中川さんとともにその活動に取り組んでいたことから、こうしたアーティストの組み合わせとなった。当日は視覚障害の方5名者とヘルパー2名が参加。最初に中川さんから「料理教室ではありません。みんなでつくって楽しみましょう」という声かけで始まった。数名は日頃から料理をしていて慣れた手つきで、受講者が料理を教わる場面も。全く料理をしたことがないという人も味付けなどに挑戦した。和気あいあいのうちに、おにぎりや豚汁が仕上がった。それでも、配膳のさいには、視覚障害の方は席につき、待っている姿勢になるのは、空気を読んでのことであると察知した中脇さんが、リレーのように豚汁のお椀をまわすことを提案。急にその場に役割が生まれ空気が動き出した。また、おにぎりはいろんな具が入っているけれど、すべてくるとノリが巻かれ、何が当たるかわからない、見えないという仕掛けに。食卓を囲んでいると、視覚障害の方が好きなアーティストの話やフェニーチェのコンサートに行っているという話なども出てきた。受講者は自分たちが働く文化施設に視覚障害者の人たちが来てくれていることにハッと気づいた瞬間もあった。振り返りでは、中川さんから、今日の参加者はコミュニケーションのたくみな人たち、普段家から出ることができない視覚障害の人たちはもつとい、と話された。でもそれは健常の人たちも同じである。社会包摂を考える上で、さまざまな気づきをもたらす本番であった。

堺AC PO 中脇 健児



ふしぎな だんじり 紙芝居

だんじり型紙芝居枠と7枚の絵、ダンスに音楽、即興物語のカオス空間に

2025年2月23日(日) 10:00~14:00
お昼ご飯は、食堂提供のカレーライスとサラダ
24日(月・祝) 13:00~15:00

アーティスト：井上 信太(美術家)、
上田 假奈代(詩人)

対象：どなたでも。未就学児も歓迎

会場・受け入れ先：東深井つどいば
食堂ふらっと

受講者(所属)：
露久志 遥((公社)堺観光コンベンション協会)、
岡田 侑人(堺区企画総務課)、
辻 奏多(堺区自治推進課)、
東 誠子(堺市立美原文化会館(アルテベル))

東深井で誰でも「ふらっと」とこれる、誰もが「ふらっと」な関係でいられる場所づくりを行うふらっとではこのところ、習い事や塾などで子どもたちが忙しくなり、立ち寄りづらくなっていることが話された。そこで、世界中の子どもたちとワークショップを重ねている堺市出身の美術家と詩人を投入することに。堺の子どもはだんじりに興味を持つだろうということで、井上信太さんからだんじり紙芝居が提案され、チラシ作成まで手がけることになり、食堂を通じて小学校へ配布された。受講者は参加申し込み用のGoogleフォームを作成するなど準備を念入りに行った。また高校生のボランティア部や美術部への声かけを食堂に依頼し、当日は乳幼児や高校生も参加し多世代が交流した。井上さんは民族楽器や照明スタンド、画材などを準備。子どもたちは民族楽器に興味を示し触れたり、段ボールいっぴいの色とりどりのマスキングテープを天井から吊ったりし始め、それに誘われるように高校生や大人もいっしょに空間づくりに参加した。初日の昼食後には紙芝居劇のリハーサル。身体やその場にあるものを使って美術家と詩人が物語をつむぐ。会場を真っ暗にして、円になって回り出したり、換気扇に光がさしこんでいるのを太陽に見立てたりするなど、誰にも先がわからない展開にドキドキが止まらない。初日には緊張の面持ちで現れた子どもが予定を変更して2日目も参加し、堂々と楽しんでいた様子も印象深い。食堂のスタッフたちも「私たちも何かしたい!」と、2日目にたこ焼きをつくり来場者に振る舞われた。受講者も来場者と積極的なコミュニケーションを行い、ふしぎなパワーにあふれた2日間となった。振り返りでは、受講者から「美しいカオス」という言葉が出てきた。この本番では、コーディネーターひとりひとりが場をともに作る存在であることが確認された。

堺AC PD 上田 假奈代



研修のながれ

4月 オリエンテーション ワークショップって何だろう・社会包摂って何だろう

5月 模擬ヒアリング(受け入れ先役:常盤盛紀)

6月 体験1・体験2 ワークショップを作ってみよう(アーティスト役:上田假奈代、中脇健児)

8月 体験3 ワークショップを作ってみよう(アーティスト役:中川圭永子) ヒアリングの準備

10月 実践1 作戦会議 ヒアリング、アーティスト選定

11月 実践2 作戦会議 アーティスト顔合わせ ワークショップ準備

12月~1月

2月 本番ワークショップ

3月 総まとめ 1年間の学びを振り返る

- ◆ コーディネーター:
公財)堺市文化振興財団事業課
事業係長 常盤 成紀
- ◆ 堺アーツカウンシル(AC)
プログラム・ディレクター (PD) 上田 假奈代
プログラム・オフィサー(PO) 中脇 健児